

# 論 說

## 道 路 觀



「君子は道を憂へて貧を憂へず」といふことがある、無論此道と「道路」とは形の上では大分違つて居るが天下の大道といふ意味に於ては少しも違ふ所はない、即ち人間が人間として通らなくてはならぬ、踏まなくてはならぬ、寸時も離れては不可ぬ踏み外しては不可かぬといふ精神に於ては全く同一である飛行機の通ふ道も、船舶の通ふ道も此點に於ては何等の相違もない、所謂水鳥の行くも歸へるもあとたへてされども道は忘れざりけり、で沉んや人間に於てをやである、若し此道を忘れたり、間違へたり、外づれたりすると遂に人間を罷めて中禪寺へでも行つて仕舞はなければならぬことになる。

道路改良會評議員  
三井地所部長 矢野亮一

普通の道路に於ても亦同じことで、歩道あり、車道あり、車道の中にも高速度の道もあれば、並速度の道もある、止むを得ざる場合には、自動車來れば馬車は避ける、馬車が來れば腕車は讓る、腕車が來れば荷車は傍へ寄つてやる、消防車と郵便車とは凡ての車が皆な道を開けてやるといふやうに、自然のさまりがある、銘々の筋道は自ら決まつて居る、若し之を無視して通ふるべからざる所を通つたり、避けるべきを避けなかつたりすると、轢死、轢傷などといふ不祥事が發生する、交通事故即ち是である。

日本人は概して一體に諦めが良すぎる、怪我でもすると直ぐ「仕方がない」と言つてしまふ癖がある、無論餘り物事に執着して、捉はれ過ぎるのは決して宜いことではないが、さりとて直ぐに匙を投げて仕方がないと諦めるのも亦感服しない、所謂人事を盡して天命を待つてなければならぬと思ふ。

ところが今日の帝都の道路は果して人事を盡して居るであらうか、昔のやうな交通機關の簡單な時代には、道路も亦自然簡單で宜かつた、随つて「桃李言はず下自ら蹊を成す」と濟し込んで居ることも出来たが、この頃のやうに、時これ金で、電車が走り、自動車が飛び、自轉車がその間を縫うて、縦横無盡にかけ廻るやうな忙しい世の中になつては、とてもそんな暢氣な事を言うて居る譯にはいかぬ。人間をローラの代りにするやうな原始時代の田圃路や成蹊式の藝當では満足することが出来ぬ、又安全を保つ譯にいかぬ。道の道とすべきは常の道にあらずといふ事もある位で、やはり時代相應に隨時順應で改良して行かなければならぬ。即ち此道路改良會が常に大聲叱呼して居る所以であらう。

外國では昔から道路の事をやかましく言つて居つた、今日でも道路の爲には惜けもなく莫大の金を投じて居る、洋行土産といへば誰でも先づ第一に道路の立派なことを稱讚しない者は無い、それだ

け日本へ歸ると、如何にも堪へられない不愉快を感じざるを得ないのである。如何に故郷忘じ難しても、此ほど悪いとは思はなかつたと覺えず嘆聲を漏らし愛想をつかすのである。此は必ずしも西洋かぶれをした譯ではない、事實と人生と道路とは寸時も離るべからざる密接關係があるからである。

吾々の實生活の基礎條件と云へば誰でも先づ第一に衣食住の三つを擧げるのであるが、此道路も亦實は住の一部分に外ならぬのである。現に西洋では、道路は廊下の延長なりと言つて居る、子供の時代からこんな風に教へられて居るから、廊下を手入すると同じやうに道路も綺麗に手入する、廊下に唾を吐かぬ人は道路に出ても唾を吐かない、廊下に紙屑を散らさない人は道路にも紙屑を落さない、道路即ち廊下、廊下即ち道路といふ風に訓練されて居るから、自然道路の手入などには金を掛けることを惜まぬやうになるのである。従つて靴穿きの儘家屋に入入しても少しも不快を感じないのである。然るに道路が悪いと、そう簡單には行かぬ、泥靴で上られては大變である、大切な絨氈の上には牡丹餅大の泥塊を落されては大事件である、であるから立間で履を拭いたり、腕がせたり、カバーを被せたりして大騒ぎを仕なければならぬやうになる、道路の改良される迄は簡易生活なぞといふことは沖も實現されない、簡易生活は何としても道路から始めなければ嘘である、道路改良は生活改善の第一義である、道路の改良さへ出来れば、家屋の建築も簡單に、履物の數も少なく、女中も省くことが出来、御用聞きも要らなくなり、或る程度までは二重生活の負擔を軽減することも出来るのであるから、君子でなくても道を憂へて貧を憂へずと云ひたくなる、西洋で道路改良の爲に金を惜まぬのも決して偶然ではない、道路改良の金を惜むは丁度農民が肥料を惜むと同じで、實にノンセンスの極である。

翻つて我が國の状態を見ると、昔から門外一步は敵國の如き感を有つて居る。敷居を跨ぐと七人の敵があるとか、又人を見たら盗人と思へとか、旅の恥は掻きすてとかいつて、内は内外は外といふ風に内外の區別が嚴然として居る爲、この垣一重が黒鐵の……といふやうなことになる。口先きでは御互に隣伴相助けなどと云ふて居るが實は向う三軒兩隣りでさへ怪しい、と云ふものは東京は實は日本六十余州の寄り合ひの世帯であるから、恐らくは向う三軒兩隣りでさへ碌々知らぬものが多いであらう、況んや町内に於てをやである、こんな風であるから、自然門外のことには冷淡になり、無關心になり、又無頓着になつたのであつて、即ち比較的に道路行政が振はなかつた所以であらう。今となつては後悔先に立たずと言ふより外はないが、遅れたりと雖も尙ほ止むに優る。兎に角この惡道路の爲に、物質上にも精神上にも直接に間接に市民はどれ程莫大の損失を被つて居るかわからぬ。

話は前後するが、西洋で道路の綺麗になつて居ることは、一つは女の勢力である。少くとも外に出た時の女の勢力、女の權幕といふものは實にえらいもので、家庭に入れば必ずしもさうでないが、外に出るとなかなかえらい。女は衣服の關係上道路の悪いことに依つて一番直接に現實に苦痛を感じるせいでもあらう、そこで道路が悪いと一番先に女の口から火蓋を切つて正面攻撃を始められるので、當局も黙つて居る譯にはいかぬ。兎に角女の勢力のえらいといふことが、確かに西洋で道路を綺麗に手入されて居る一つの原因であらうと思ふ。

吾輩が先年獨逸に遊んだ時に獨逸産業の勃興は全く道路計畫の宜しきを得た爲であるといふことを聞かされたことがある。これは彼の普佛戰爭の後にビスマークが新聞記者を招待して、今回の

大勝利は全く諸君のお蔭である、新聞の力であると大に稱揚したのと同じで、多少割引して聞かなければならぬとは思ふが、兎に角道路の完成といふことは國防上は無論のこと、一國の産業上にも商業上にも衛生上にも、保健上にも、あらゆる日常の實生活の上に非常な密接の關係のあることは吾々の日々體驗して居る所である。

尙ほ一つ面白いと思つた事は、伯林では雨の盛んに降つて居る最中に、人夫が平氣な顔をして水撒きをやつて道路を洗つて居る。なんだか不思議に感じたので之を當局者に聽いてみると、成程御不審は御尤もです、神様が普遍的に大々的に水撒きをやつて呉れて居る最中に、此の小さな人間がポツポツと水撒きをするといふことは、餘り馬鹿けて居るやうにも思へるが、若し雨の降る日は水撒きをするに及ばぬといふことにすると、多くの人夫の中には、少しばかりバラ／＼と降つても直ぐ撒きをやめてしまふ者があるかも知れん、一體常識判斷といふことは善い事ではあるけれども、それが區々なつては困る、さればといつて雨がどれ程降つたら水を撒くには及ばぬといふ降雨の量を豫め規則できめることも事實困難であるから、已むを得ず一切無條件で晴雨に拘らず一日に何回何時と何時に必ず撒水と掃除をしなければならぬことに定めたのである、といふ説明であつた。如何にも獨逸式で杓子定規のやうにも感ぜられ、餘り御丁寧すぎるやうにも思はれるが、併し道路掃除といふことに如何に熱心で、如何に重きを置いて居るかといふことは、此の一事を以ても推すことが出来る。

西洋では家より先き道路を造つて、さうして瓦斯水道その他埋設物まで一切完備した後でなければ家屋の建築は許さぬといふことになつて居るが、我國は是と反對で、先づ家屋を作つて後から道路

が出来るのであるから、家は出来ても道路は猶ほ出来ないことがある。現に我が東京市の如きその一例で東京には家屋ありて道路なしと喝破した人もある位で如何に最眞目に見ても實際東京市には道路らしき道路は殆んどない。

大部分は道路敷である。單に路面あるのみである。随つて一朝雨が降れば泥濘三尺少しく風が吹けば黄塵萬丈、而も此路面は勝手放題に掘り返されて、到る所に親知らず子知らずといふ陥穽と泥田とがある。便利とか不便利とかいふことを通り越して、人命にまで關する程の慘狀を呈して居る。是でも都大路と言へるかと思ひたい位である。先般來朝した觀光團の一人は、東京市中に電車が動いて居るのを見て驚いたといふことであるが、電車と言つて「火の車」と言はれなかつた。けはまだ幸である。或は田圃の中に電車が泳いで居ると思つて驚いたのかも知れぬ。

是は大阪の話であるが、小學校の兒童から自由畫を募集した所が、その中に自動車が無遠慮に泥をはね飛ばしながら走つて居る畫を描いて、それに「自動車が悪いのか道路が悪いのか」と書添へたのがあつたさうである。或は東京の道路を見た感想かも知れぬが、穿ち得て妙で、無邪氣なうぶな兒童の頭腦にすら斯く映るのであるかと思へば、實に寒心に堪へない。嗚呼此道路を如何せん！

無論東京にも若干立派な舗装道路は出来て居るが出来たか出来ぬかに瓦斯屋、水道屋、電話屋などが遠慮なしにモウ直ぐ後から之が掘り返しを始めて居る統一の無いこと夥しい。或は折角なけなしの金を出して列べた木煉瓦が浮き出して賽の河原と同じで再三再四手直し又手直して何時になつたら完全になるのかわからぬやうな事實も見受けて居る。材料が悪いのか、工事が粗漏なのか、職

工が熟練しないのか、或は寒暑風土氣候等の關係か、どこかに缺陷があるに違ひない。木煉瓦若し鑛あらば或は泣てるかも知れぬ、無論當局者には夫々説明の出来る立派な理由もあることゝは思ふが何れにしても事實は事實で如何にも御役所仕事らしく不親切な不經濟な且つ不生産的な勿體ない事をして居るやうにしか思へない。無い袖は振られぬと云ひながら斯んな不體裁な有様を見せつけられると、實に情けなくなる。此でも市民膏血の愧まりかと思ふと遺憾に堪へないのである。無論羅馬の都は一日に出來たるにあらず、今日は過渡時代であることも分つて居る、それにしても鋪裝工事を始めてから相當の年月も經つて居る、相當の經驗も積んで居る筈である。又土瀝青の工事は東京の方が進んで居るか、木煉瓦の工事は大阪の方が上手らしいといふ話も聞かされたことがある、何れにしても技術上の事で吾々門外漢には分らぬから切に當局者の御研究を願ひ度いのである。

今度の復興計畫も道路の擴張と整理が其主眼であるはいふ迄もない。外國の重なる都市では路面敷地が全都市面積の二割五分から四割四五分位まで占めて居るに拘らず、我東京は僅かに一割餘で有つたのだから一昨年の大震災火災の慘狀に徴しても、又交通事故の頻發に鑑みても、之を擴張するのは當然の事であるが、田圃にしたり、賽の河原にせられては困る。前者の覆へるは後者の戒め。

新聞に出て居る當局の談に依ると、七月二十日時事夕刊今日市内の道路の約四割は掘り返しをやつて居つて通行が出来ないといふことである。又本年の一月から六月までの交通事故を見ると七千三百二十件で、其中に即死が九十一人、負傷者が四千三百三十九人といふ多數に上つて居る。無論此の中の大部分は本人の過失又は不注意であらうと思ふけれども、道路の不完全なこと狹隘なるこ

と、人道車道の區別のないこと、折角舗装が出来ても切れくゞで一貫して居ないこと連絡が缺けて居ること、曲り角踏切等の整理が出来て居ない爲有難味の少ないこと等も、大に與つて力あることと思ふ。人を訪問するのにも豫め代りの足袋を用意して行つて其の家の玄關先ではきかへるなどといふ話も珍しくない位で、滑稽以上である。兎に角市民が此惡道路の爲に如何に惱まされて居るか如何に迷惑して居るかといふことを如實に證して餘りあると思ふ、電車の込み合ふのも押し合ひ、へし合ひも、一つは此惡道路の爲である。道路さへ宜ければ一區や二區は徒歩して差支ないのである。徒歩する方が健康上にも宜いのである。毎日少くも一、二哩位は戶外を徒歩しなければ市民生活の健康は保たれないのである。であるから多くは面倒な乗り換へなぞ仕たくないものである。實は喜んで徒歩したいのである。又道路を碎いたり、電車の乗り降りに厄介な高足駄の如きも道路さへ宜くなりや自然に無くなるのである。

我國では古來對人的の道德は可なり發達して居る。即ち三尺離れて師の影を踏まずとか、上長に對して道を譲るとかいふやうなことは幼少の時から能く訓へられて居るのであるが、一般社會に對する公德、一般公衆に對する訓練といふものは殘念ながらまだ十分でないから、自然交通事故なども頻發するのであらうと思ふ。倫敦の交通整理は巡査の指一本に在りといふことは有名な話で、歐米各國共に皆これを羨み、是非之を眞似たいと思つて居るけれども、何處でも倫敦ほどにうまく行かない、いくら巡査を見學にやつても始終不成功に終つて居る。といふものは倫敦の巡査は無論えらいに違ひないが、それよりも倫敦の市民が此の巡査の指一本に服従するといふ公德即ち市民的社會的



訓練といふものが能く行き届いて居ることを看過してはならぬ。巡查の指一本に十分の權威を持たすだけの倫敦市民の態度といふものは一層見上げたものだと思ふのである。吾々は少くも此社會の秩序を守るといふ英國の紳士道だけは大に買つてやらなければならぬと思ふのである。

要するに道路交通に關することは無論當局者にも重大なる責任はあるが、吾々市民たるものにも亦より大なる責任のあることを忘れてはならぬ。所謂自治の訓練が即ち是である。自治のみでは不可ぬ又協同の精神も無ければならぬ自治と協同只々是である。技術に關することは餅は餅屋でどこ迄も専門家に御頼みして安全に交通が出来るやう危険なしに往來が出来るやうに仕て貰はなければならぬが、併し之を他所事とのみ思ふては不可ぬ。市民各自の日常生活にも直接影響して來るのであるから、當局者を責める心持で銘々も亦自分を責め自分に反省して、絶へず銘々の脚下を返照して、どこ迄も向上の一路を辿りつゝ、改良に改良を加へて王道坦々といふやうに仕なければならぬと思ふのである。

茲に於てか道路改良會の如き有力なる團體は、必ずしも有形の道路のみならず、無形の道路、即ち初めに述べた君子は道を憂へて貧を憂へざる程の訓練といふことにも、大に着眼せられんことを希望するのである。此道や行く人なしに秋の暮になつては不可ぬ、目に見える道路の方はまだ始末が宜いが、目に見へぬ此道の缺陷は夫婦の間でも、親子の間でも氣がつかぬ位であるだけ、夫だけ危険も多いのであるから、龜裂の出來ないやうに、荆棘の生へないやう、絶へず手入して、彼道と共に此道も亦日新日々新、又日新にしたいものである。